

第2部

子どもの将来をイメージできる保護者と
できない保護者で何が違うのか

GIGAスクール構想が始まり5年がたち、一人1台端末をもち、児童・生徒の学び方が大きく変わった。また高等学校での探究学習が、2022年から本格的にスタートし、小学校・中学校の多くの教科の中にも探究的な学習が取り入れられている。そんな中2024年、株式会社学研ホールディングスマーケティング戦略室（中村基孝室長）による、『自宅学習の実態と保護者の教育観』調査が行われた。今、保護者は教育に何を求めているのか。そして子どもの将来に向けて、どう結びつけているのか。調査・分析レポートの一部を紹介する。

保護者は体験的学びを重視

「子どもの勉強で（保護者が）重視していること」（図1）として、「様々なものに触れたりいろいろな体験をすること（小学生重視割合56・8%）」、「受験や検定など」目標を決めて、勉強をやり遂げる経験（中学生重視割合50・6%）」が上位にきた。

また、「毎回の学校のテスト・試験でよい成績を取ることに」よりも「学校の授業に遅れずに

ついていくこと（小学生重視割合48・8%、中学生重視割合53・2%）」が重視されていることがわかった。

中学生では「受験に備えること」も重視されているが（37・7%）、「学校の成績よりも、本人の得意なことや個性を伸ばすこと（小学生重視割合45・3%、中学生重視割合36・9%）」が重視されている点も注目に値する。

「学校の勉強には落ちこぼれずについていければよい。それよりも経験を積むことが大事。意欲をもち、得意なことや個性を伸ばしてほしい」。このように望んでいる保護者は、少なくとも半数近くはいることが読み取れる。

身につけさせたいのは
社会を生き抜く力

では、保護者が思う「様々な経験を通して得られる「子どもに必要な力・身につけさせたい力」（図2）とは、どんな力なのだろうか。

図1 子どもの勉強で（保護者が）重視していること

小学生の保護者(n=2497)		中学生の保護者(n=1158)	
順位	Q「お子様の勉強で特に重視していること」 重視割合(%)	順位	Q「お子様の勉強で特に重視していること」 重視割合(%)
1	様々なものに触れたりいろいろな体験をすること 56.8	1	学校の授業に遅れずについていくこと 53.2
2	学校の授業に遅れずについていくこと 48.8	2	（受験や検定など）目標を決めて、勉強をやり遂げる経験をする 50.6
3	学校の成績よりも、本人の得意なことや個性を伸ばすこと 45.3	3	様々なものに触れたりいろいろな体験をすること 43.4
4	（受験や検定など）目標を決めて、勉強をやり遂げる経験をする 35.5	4	受験に備えること（小学校や中学校・高校の受験） 37.7
5	毎回の学校のテスト・試験でよい成績を取ること 18.3	5	学校の成績よりも、本人の得意なことや個性を伸ばすこと 36.9
6	スポーツや芸術などの得意分野を活かせる学校に進学すること 17.3	6	毎回の学校のテスト・試験でよい成績を取ること 36.9

※5段階中「1.非常に重視している」「2.かなり重視している」TOP2の合計

図2 保護者が思う「子どもに必要な力・身につけさせたい力」

小学生の保護者 (n=2497)		中学生の保護者 (n=1158)	
順位	Q「子どもに必要なと思う力・身につけさせたい力」 重要割合(%)	順位	Q「子どもに必要なと思う力・身につけさせたい力」 重要割合(%)
1	人の意見を受け止めたり、自分の考えを適切に伝える力 79.8	1	社会生活に必要な知識やマナー 79.6
2	社会生活に必要な知識やマナー 77.9	2	人の意見を受け止めたり、自分の考えを適切に伝える力 78.7
3	様々な事に関心を持ち、自ら調べたり学ぶ姿勢 75.5	3	様々な情報をうのみにせず自分で考えたり判断する力 76.9
4	様々な情報をうのみにせず自分で考えたり判断する力 75.3	4	様々な事に関心を持ち、自ら調べたり学ぶ姿勢 74.5

重要の割合(%)…「絶対重要」と「かなり重要」の合計

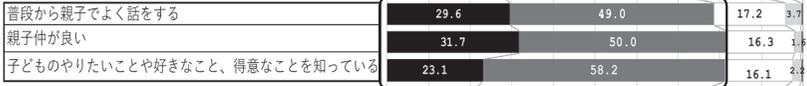
●調査対象 小中学生をもつ全国の保護者
※第一子についての回答
●回答者数 3655件
●調査方法 インターネット調査
●実施期間 2024年9月

図3 親子関係と子どもの将来

Q 以下について、どの程度あてはまりますか？

小中学生の保護者 (n=3655)

■親子関係に関する項目



■子どもの将来に関する項目



子どもの特長を把握し、将来イメージがある

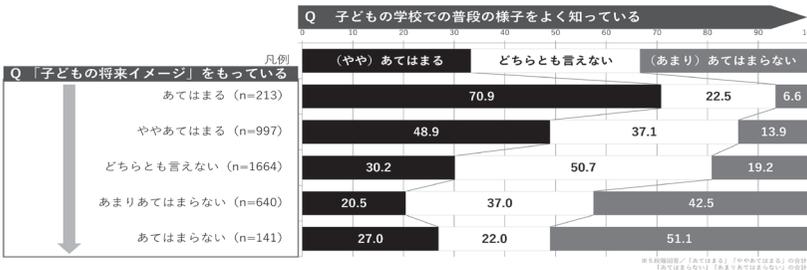
子どもの特長は把握しているが、将来イメージがない(曖昧)

要因は何か？

小学生・中学生共通で、「人の意見を受け止めたり、自分の考えを適切に伝える力」「社会生活に必要な知識やマナー」「様々な事に關心を持ち、自ら調べたり学ぶ姿勢」「様々な情報をうのみにせず自分で考えたり判断する力」。この4つが圧倒的に重視されている。

他者とコミュニケーションをとりながら、適

図4 「子どもの将来イメージ」と“学校つながり”

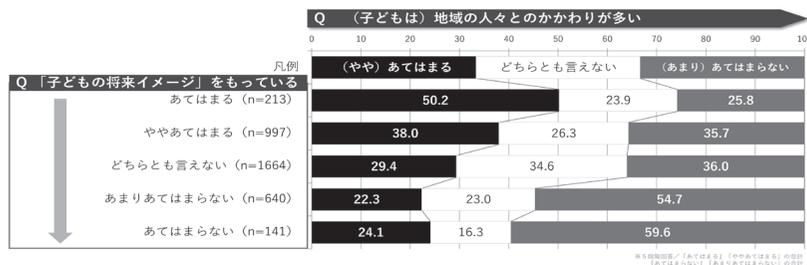


切な判断力をもって社会の中で積極的に生きていく。まとめれば「社会を生き抜く力」といえるだろう。

子どもの将来のイメージをもっている？

子どもにたくましさを求める保護者の、子ども

図5 「子どもの将来イメージ」と“地域とのつながり”



それでは、逆に将来の姿をイメージできている保護者とは、どんな保護者なのだろうか。その特性を詳しくみてみよう。

(図4)は、保護者が「子どもの将来イメージをもっている」ことと、「子どもの学校での普段の様子をよく知っている」こととの相関を表している。これを見ると明らかに「子どもの将来イメージをもっている(あてはまる・ややあ

学校での様子から将来をイメージ

子どもの好きなこと、得意なことを知っている保護者は多い(81・3%)。しかし、実際にそれを子どもの将来の姿にまでつなげてイメージできている保護者の割合は、その半分に満たない(33・1%)。

子どもにたくましさを求める保護者の、子ども

ところが、「子どもの将来をイメージしている」保護者は、約3割にとどまっている。「イメージできていない(あてはまらない・あまりあてはまらない)」保護者は、約2割いるという結果だった。このアンケートで定義した将来のイメージとは、職業に限らず、進路・進学も含んでいる。

もとのコミュニケーションについてもみてみよう(図3)。「普段から親子でよく話をする」「親子仲が良い」「子どものやりたいことや好きなこと、得意なことを知っている」は、3項目とも小学生・中学生まとめて約8割(あてはまる・ややあてはまるの合計)。

図6 「子どもの将来イメージ」と学校教育観

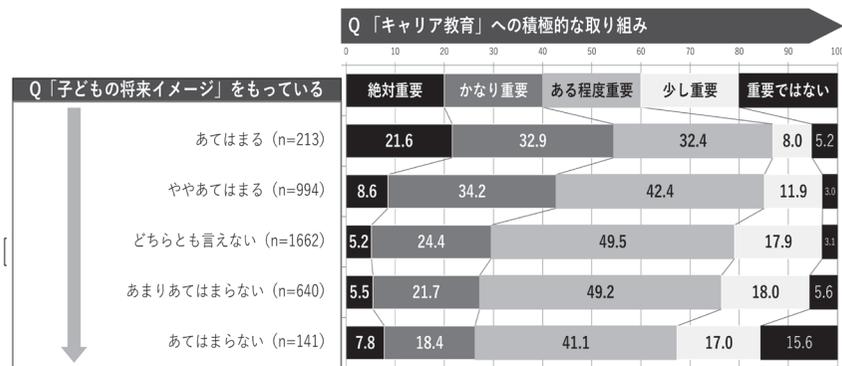
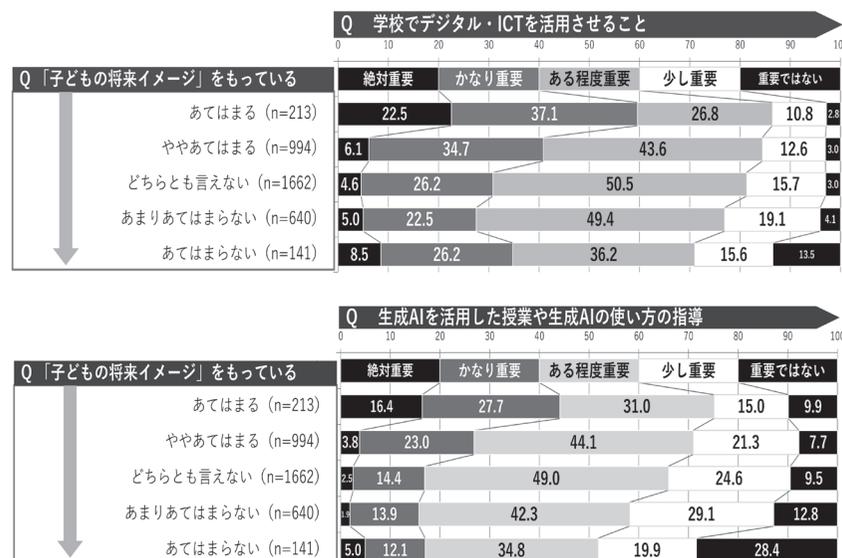


図7 「子どもの将来イメージ」と情報評価



てはまる)「保護者ほど」、「子どもの学校での普段の様子をよく知っている(あてはまる・ややあてはまる)」ことがわかる。

地域の人々とのかわり的重要性

(図5)は、「子どもの将来イメージをもって

いる「ことと」、「子どもは」地域の人々とのかわりが多い「こととの関係を表している。この図からは、「子どもの将来イメージをもって(あてはまる・ややあてはまる)」保護者ほど、「子どもの地域の人々とのかわりが多い(あてはまる・ややあてはまる)」傾向が読

学校のキャリア教育と将来イメージ

次に、学校で行われるキャリア教育についてみてみよう。今回のアンケートでは、キャリア教育の定義を「児童・生徒の基礎的・汎用的能力(人間関係形成力、課題対応力など)を育て、それぞれの職業観や人生観などを醸成する教育」としている。

アンケート結果をみると、学校における「キャリア教育への積極的取り組み」を重要視する割合は、「ある程度重要」まで含めれば、全体のほぼ4分の3を占めた。小中学生をもつ保護者にとって、学校でのキャリア教育は重要視されているということなのだろう。

(図6)をみると、「子どもの将来イメージをもっている(あてはまる)」保護者の87%が、キャリア教育を重要と考えている。これは、見方を変えれば、その学校でのキャリア教育のために、総合的な学習の時間を充実させることが大切といえよう。

み取れる。

子どもにとって、地域の身近な大人と接することは、社会の多様性を実感し、将来イメージにつながる興味関心が広がるきっかけとなり得る。そのため、親も地域社会と関わり、家庭や学校外でも子どもにそのような機会を提供することが重要といえるだろう。

ICT・生成AIに対する意識

【図7 P19】をみてみよう。全体的に、学校におけるICT・生成AIの活用が重要視されていることがわかる。これは学校での実績だけでなく、活用してほしいという期待も含まれている。この傾向は、「子どもの将来イメージをもっている（あてはまる）」保護者のほうに、より強く表れている。「ある程度重要」まで含めれば、「ICTの活用」は86・4%、「生成AIの活用」は75・1%になる。

ここまで「子どもの将来をイメージできる」保護者像をみてきた。学校での様子や地域の人々とのかわりをつかんでおり、学校でのキャリア教育やICT活用を価値あることと捉え、その意義を実感している保護者である、ということがわかった。

子どもの将来イメージをつかめていない保護者とは？

では、まだ子どもの将来イメージをつかめていない保護者像について見てみよう。

【図4 P18】をみると、「子どもの将来イメージをもっている」ことに、あてはまらない保護者の過半数が、「子どもの学校での普段の様子をよく知っている」ことに、あてはまらない、ややあてはまらないと答えている。

【図5 P18】では、6割近くが、「子どもは地

域の人々とのかわりが多い」ことに、あてはまらない・あまりあてはまらないと答えている。また、学校における生成AIの活用について

【図7】は、重要視する割合（ある程度重要まで含む）が51・9%にとどまっている。

一方で【図6 P19】では、キャリア教育に重要性を感じている割合は、「ある程度重要」まで含めると、67・3%になる。子どもの将来イメージをつかめている保護者の86・9%には及ばないが、数値だけ見れば、低くはないといえる。

学校側で、総合的な学習の時間を充実させることや、保護者側で、学校生活における子どもの特長を理解し得る方法が提供されるとよいといえる。「つかみたい」というニーズに応じていく必要があるだろう。

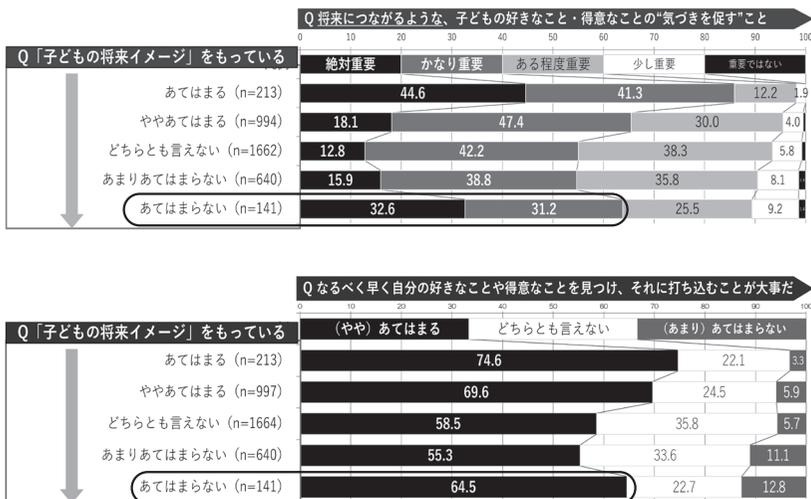
どうすればイメージがつかめる？

では、「将来イメージをもっていない保護者」は、何を求めているだろうか。

【図8】から、「将来につながるような、子どもの好きなこと・得意なことの“気づきを促すこと”を重要視（絶対重要・かなり重要を合わせて63・8%）していることがわかる。

また、「なるべく早く自分の好きなことや得意なことを見つけ、それに打ち込むこと」にも重要性を感じているようだ（あてはまる・ややあてはまるを合わせて64・5%）。

【図8】「子どもの将来イメージ」をもっていない保護者



「子どもの将来をイメージできていない」保護者は、学校での子どもの情報が不足しており、地域で子どもが活動する様子を見る機会が少ない。また、学校のキャリア教育を重視しつつも結果を得られておらず、そして、子どもの好きなこと・得意なことに出合えるチャンスを待っている。といった保護者像であることがわかった。